

Title	格付与と中立範疇
Author(s)	野村, 泰幸
Citation	大阪外国語大学学報. 56 p.63-p.73
Issue Date	1982-03-10
oaire:version	VoR
URL	<a href="https://hdl.handle.net/11094/80883">https://hdl.handle.net/11094/80883</a>
rights	
Note	

*Osaka University Knowledge Archive : OUKA*

<https://ir.library.osaka-u.ac.jp/>

Osaka University

## 格付与と中立範疇

野村泰幸

Nach der Case-Theorie von N. Chomsky (1981) wird einer NP „Case“ vom Element angeordnet, das diese NP regiert. Es ist empirisch anzunehmen, daß sich bei der „Case-Anordnung“ (Case-Assignment) parametrische Variationen ergeben. Als Beispiel kann man die Betrachtung von H. van Riemsdijk (1980) geben, worin er die Case-Anordnung des deutschen Adjektivs auf Grund von der „Neutralization-Hypothese“ zu erklären versucht. Um diese Anordnung kohärent zu basieren, sollen die Case-Merkmale  $[\pm S, \pm CA, \dots]$  als primäre Einheit betrachtet werden, die den kategorialen Merkmalen  $[\pm V, \pm N]$  entsprechend zu markieren sind. In 1. wird die Case-Anordnung des deutschen Adjektivs dargestellt. In 2. wird die Neutralization-Hypothese vorgestellt, die sich aus einer konfigurationellen Gemeinsamkeit zwischen AP- und VP-Struktur ableiten läßt. In 3. werden die Case-Merkmale und die Regeln zur Case-Anordnung eingeführt, wodurch die Cases wie, objective‘, oblique‘ usw. markiert werden. In 4. werden die parametrischen Variationen der Case-Anordnung erwähnt.

0. Chomsky (1981)の「格理論」(Case Theory)によると、音声マトリクスを有する名詞句には、それを統率する要素によって「格」(Case)が与えられねばならない。<sup>(1)</sup> 抽象的な格の概念に対しては批判も考えられないわけではない。しかし、ドイツ語では形態論的に格を決定することが可能であり、この格理論は少なからず重要な視点を提起するように思う。

格付与が個別言語の間で parametric な差異を示すことは十分に予想され、たとえば Van Riemsdijk (1980)のように、ドイツ語形容詞のいわゆる格支配を形容詞と動詞の「中立化」(the neutralization)の観点から考察した試みがある。ただし、語彙的形容詞の範疇素性については、その規定が必ずしも充分ではない。充分な規定を与えた上で形容詞の格支配を説明するためには、格を基本単位とみなすのではなく、格を構成する素性を設定し、有標化にもとづいて格を規定することが必要であろう。同時に、格付与要素を確定することも可能となり、parametric な差異もこの規定に関する有標性によって示される。

以下、1. ではドイツ語形容詞の格支配を取り上げ、2. では語彙範疇の中立化を考察する。3. では格の素性と、素性マトリクスにもとづいて格を規定する方式を述べ、4. では格付与の有標性について考察する。

1. 範疇部門の規則が $\bar{X}$ 理論の条件にしたがうと仮定し、基底部規則を次のように表わす.

- (1)  $X' \rightarrow \dots X \dots$

なお、Xの左右は無標の語彙範疇によって占められるが、無標の場合には名詞、動詞、形容詞は同一の補足部(complement structure)をとると仮定される。<sup>(2)</sup>つまり、Xが [+V, ±N], または [±V, +N] のとき、Xは NP-Complement をとると仮定することもできる. ところが、この基底部規則によると、英語では (4 a) のような適格ではない構造も生成される.

- (2) a. destroy the city  
b. destruction of the city  
(3) a. write the book  
b. writer of the book  
(4) a. \*proud John  
b. proud of John

Chomsky(1981)はこの不適格性を「格フィルター」によって説明している。<sup>(3)</sup>

- (5) <格フィルター>

名詞句が音声マトリクスを有し、かつ格をもたないとき、その名詞句は排除される.

ここで「格」というのは、名詞句を統率する要素によってその名詞句に付与されるものであり、主格(nominative), 目的格(objective), 斜格(oblique)を指し、さらに [-N] 統率要素の特性によって付与される格がある. ここでの関連で示すと、次のような定義となる。<sup>(4)</sup>

- (6) a. 名詞句は、下位範疇素性  $\_\text{NP}$  をとる動詞によって統率されるならば、目的格である.  
b. 名詞句は、前置詞によって統率されるならば、斜格である.

英語では、格付与要素は [-N] 範疇の動詞と前置詞のみであり、[+N] 範疇の形容詞や名詞は格を付与する要素とはなりえない. したがって、(4 a) で適格な NP-Complement を与えるには、意味内容をもたず、格付与要素として機能する前置詞 of を必要とし、これによって名詞句に格が付与され、格フィルターに抵触することのない適格な構造となる. この説明によれば、基底部規則(1)に新たな条件を加える必要はないであろう. つまり、英語の形容詞句については格フィルターを適用することによって、(不)適格性を説明することができるようになる.

ドイツ語では形容詞にも NP-Complement の格を指定するものがあり、形態の上からは殆ど

が属格，または与格を支配する．

- (7) a. 属格：ansichtig, bewußt, fähig, gewiß, kundig, mächtig, satt, verdächtig, würdig, etc.  
 b. 与格：ähnlich, beschwerlich, erinnerlich, förderlich, gemäß, gleich, recht, übel, verhaßt, zuträglich, etc.

- (8) a. Er ist seines Sieges(gen.)gewiß.  
 (he is of-his-victory confident)  
 b. Er ist seinem Vater(dat.)ähnlich.  
 (he is to-his-father like)

形態論的な格としては，ほかに主格，対格があり，名詞句は格によって有標化される．

オランダ語では，固有名詞とそれに準ずる親族を表わす名詞のみが格に関して有標であり，形態の上では主格をとるか，またはそうでないかである．古い表現では人称代名詞や所有代名詞が属格をとることがあったが，現代語ではそれに代わって前置詞句の用いられることがある．<sup>(5)</sup>

- (9) a. Ontferm u mijner(gen.).  
 b. Ontferm u over mij.  
 (take-pity you on me)  
 (10) a. Hij is zich zijner verantwoordelijkheid(gen.)bewust.  
 b. Hij is zich bewust van zijn verantwoordelijkheid.<sup>(6)</sup>  
 (he is himself conscious of his responsibility)

前置詞 van については，英語の場合と同様に，格フィルターによる説明も考えられないわけではない．しかし，4.でも述べるように，むしろこの問題は形態上の格の区別を保持している言語と，そうでない言語との間の差異に還元される性質のものであろう．

この点に差し当たり触れないとしても，形容詞句の構造を英語のそれと比較すると，そこには明らかな相違がみとめられる．つまり，英語のように前置詞の挿入によって名詞句に格が付与される言語に対して，ドイツ語やオランダ語では前置詞の挿入を必要としない構造がある．しかし，形容詞にも格付与をみとめるとすると，i) Chomsky(1981)で示された「格理論」をより広く捉え直すか，あるいは，ii) ドイツ語の形容詞を，オランダ語の場合とともに，有標のケースとみなすことも考えられる．しかし，このような拡大解釈に依拠する前に，ドイツ語の個別文法の内部分で形容詞が示す統語上の特性を明らかにし，その上で動詞句との対応を指摘する必要がある．

むしろ、このような分析こそがさきに示した $\bar{X}$ 理論の基礎にある前提に沿うものであろう。<sup>(7)</sup>

2. ドイツ語は範疇部門で SOV 語順をとると考えられる。<sup>(8)</sup> ドイツ語が configurational な言語であるとする、動詞句が構成され、動詞はその NP-Complement に後続する。形容詞についても同様で、(8)のように、形容詞は NP-Complement に続くのであり、その逆ではない。さらに、この NP-Complement と形容詞の関係は次のような句構造で表わされるが、これは動詞句と共通する点である。<sup>(9)</sup>

- (11) [A' NP A]

NP-ComplementがA'の内部におかれることの理由としては、A'の前置が挙げられるだろう。

- (12) a. Ihm ungeläufig scheint diese Sprache nicht zu sein.  
(to-him not-fluent seems this language not to be)  
b. Dem Illyrischen verwand sind ferner die folgenden Sprachen.  
(to-Illyrian related are further the following languages)

さらに、NP-Complement と A との順序は、いわゆる冠飾句においても同様である。

- (13) a. der seiner Freundin überdrüssige Student  
(the of-his-girlfriend weary student)  
b. ein ihm ungeläufiges Wort  
(a to-him unfamiliar word)

しかし、重要な点は configurational な構造の中にみとめられる範疇間の対応関係であり、そこから導き出される「中立化仮説」(the neutralization hypothesis)である。周知のように、語彙範疇は素性 [±V, ±N] によって表わされ、語彙的形容詞は [+V, +N] と表記される。また、名詞句に格を付与する要素は素性 [-N] をもつ語彙範疇である。したがって、この条件のもとでは形容詞は格を付与することができない。そこで、Van Riemsdijk(1980)は、i)ドイツ語の形容詞を素性 [+V] によって表わし、さらに ii)素性の「非示差性」にもとづいて抽象的な格が付与されるように、付与条件を弛める方式を提案している。<sup>(10)</sup> その場合には、素性 [+V] によって表記される語彙項目を挿入する節点が必要となるが、統率要素はX<sup>0</sup>の形式で示される要素に制限されるため、この節点は [+V]<sup>0</sup> で表わされる。

- (14)  $[X, [_{[+V]}, \dots [_{+V}]^0] X]$

X=N とすれば、形容詞の付加語的用法 (15a) が説明される。この例では、 $[+V]'$  がNの指定辞(specifier)として機能している。これをX=V、つまり(15b)と比較すれば、形容詞句と動詞句との間に間範疇的(cross-categorical)な現象がみとめられるだろう。

- (15) a.  $[N, \text{ein } [_{[+V]}, \text{ihm } [_{[+V]}^0 \text{ ungeläufiges}]] \text{ Wort}]$   
 (a to-him unfamiliar word)  
 b.  $[S, \text{daß } [S \text{ das Wort } [V, [_{[+V]}, \text{ihm } [_{[+V]}^0 \text{ ungeläufig}]] \text{ ist}]]]$   
 (that the word to-him unfamiliar is)

さらに、ungeläufig などの形容詞に代わって動詞が用いられた場合も、(14)の句構造によって表わすことができる。

- (16) a.  $[N, \text{ein } [_{[+V]}, \text{ihn } [_{[+V]}^0 \text{ hassendes}]] \text{ Mädchen}]$   
 (a him hate-ing girl)  
 b.  $[S, \text{daß } [S \text{ ein Buch } [V, \text{ihr } [_{[+V]}, \text{zu } [_{[+V]}^0 \text{ schenken}]] \text{ ist}]]]$   
 (that a book to-her to present is)

形容詞句と動詞句との間にみられる間範疇的な現象は、このように語彙範疇を中立的に表わすことによって説明されるだろう。

しかし、問題は依然として残る。たとえば、Chomsky は格付与要素の類として素性  $[-N]$  をとる語彙範疇を指定しているが、この点と素性の「非示差性」との関係は、結果として類の置き換えを意味するのか、あるいは拡大化とみなすべきか、実は判然としない。3. では、このどちらとも異なるアプローチから格付与を考察し、有標性の観点から試案を示す。

3. 中立化は、結果としては範疇間の区別を消失させる方向に進むものであろう。そこで、範疇の類を差し当たりミニマムに捉えるとすると、仮りにそれが X,Y (X≠Y) から成り立つならば、論理的には中立化に対するなんらかの条件が存在する筈である。ただし、ある特定の構造について、どのような組み合わせによって X, Y を定めるかという問題は、対象となる範疇に対応して、経験的に決定することになる。それが、個別言語内にみられる間範疇的な現象を説明する上で問題となってくるならば、その決定は個別文法内部での「選択」(option)に係わる性質のものであろう。ドイツ語の形容詞句と動詞句との構造上の共通性をもとに、語彙的な形容詞や動詞に素性

[+V] の類を対応させるのは、この選択の一例である。それにもかかわらず、この結論には明確ではない点が残る。2. で示したように、ドイツ語の形容詞を [+V] によって規定し、さらに素性 [-N] に関して非示差的であることが格を付与するための条件であるならば、中立化を前提として、形容詞の — 見かけの上での — 格付与を説明することができるだろう。しかし、仮りに [+V]<sup>i</sup> タイプの構成素が [+V, -N] に対しては示差的ではないとしても、ドイツ語の形容詞を [+V, +N] ではなく、[+V] によって規定する理由はやはり明確ではない。述べるまでもなく、これは、素性による形容詞の定義が動詞のそれとも異ならないことを意味している。つまり、範疇素性による従来なされてきたような規定は部分的に修正されねばならないだろう。したがって、この点に抵触しないためには、別の角度から格付与を考察する必要がある。

周知のように、形容詞の NP-Complement は形態の上からは与格、属格をとり、また少数であるが、対格をもとる。一方、[+V]<sup>0</sup> に語彙挿入された動詞は、現在分詞のとき、対格を NP-Complement に与える。このほかにも与格や属格を与えることは改めて付け加えるまでもないが、これについては対格の場合とは別の統率関係を設定する必要があるだろう。<sup>(11)</sup> 形容詞の NP-Complement が対格をとる場合を有標化されたケースとみなすならば、格付与に関して形容詞と動詞は相補的な関係におかれる。したがって、この点をも説明する必要があるだろう。ここで述べるのは素性にもとづいて格を規定する方式であるが、このようなアプローチは既に音韻論や $\bar{X}$ 理論で確立されたものであり、とくに目新しいものではない。その基本的な素性については、Den Besten(1979)、また Van Riemsdijk(1980)の提案が参考となる。ただし、この方法については不明の部分が多い。たとえば、後者で提示されている素性 [±S], [±CA], [±ACC], [±GEN] のうち、[±ACC], [±GEN] を設定する理由は明らかでなく、この素性のシステムには剩余的な部分もみられる。したがって、ここでは [±S] と [±CA] を取り上げる。なお、[±S] は範疇 'subject', [±CA] は 'closest argument' を意味している。

いま、Den Besten(1979)の提案をもとに、[αS] と [βCA] を用いて主語（主格）、直接目的語（対格）および他の目的語（斜格）を次のように表わす。<sup>(12)</sup>

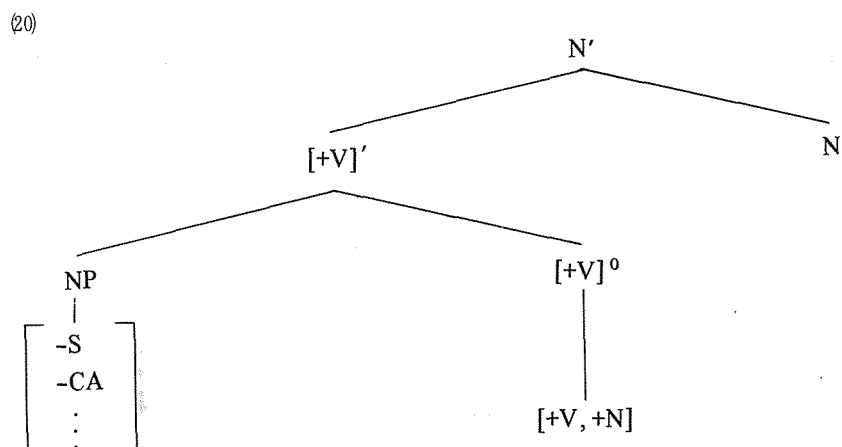
- (17) a. 主 格 主 語      [+S, -CA, ...]  
       b. 対格直接目的語    [-S, +CA, ...]  
       c. 斜 格 目 的 語    [-S, -CA, ...]

‘…’は前置詞の対格目的語や与格から属格を識別するために必要な素性の複合体を表わしている。ただし、これらの素性は a. 主格主語や b. 対格直接目的語では irrelevant である。ところで、固有の格(inherent Case)のみが語彙部門で有標化されていると仮定すると、形容詞には(18)、動詞には(19)のような語彙エントリーが与えられる。

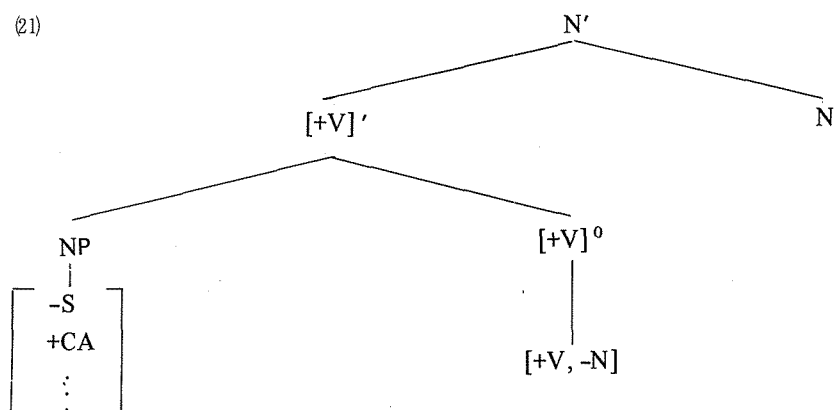
- (18) a. gewiß: [+ NP ] (genitive)  
 b. ähnlich: [+ NP ] (dative)

- (19) lesen: [+ NP ] (accusative)

形容詞の NP-Complement が、対格のように有標のケースを除いて、属格、または与格をとることは既に述べた。したがって、格の素性と範疇素性に対して次のような関係を与えることができるが、これによって(15a)が説明されるだろう。



また、(16a)のように [+V]<sup>0</sup>に挿入された語彙的動詞については、各素性の関係は(21)で示される。



統率を、仮りに‘\*’によって表わすと、素性の指定は次の規則によって記述することができる。

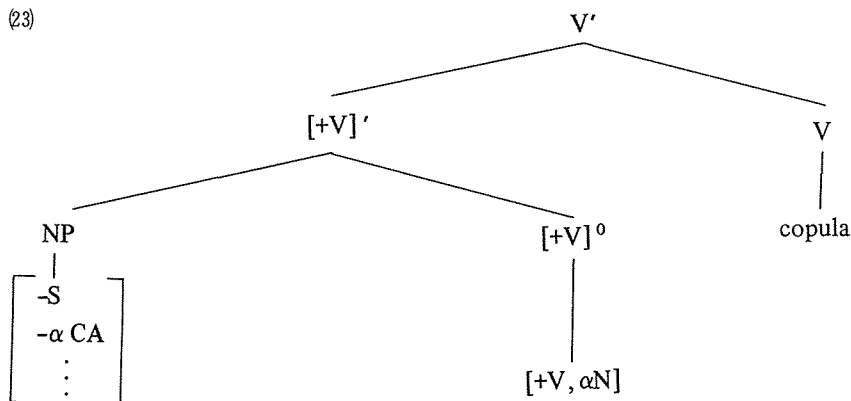


(22)

$$C(NP_i) \longrightarrow \begin{bmatrix} -S \\ -\alpha CA \\ \vdots \\ \vdots \end{bmatrix} / \begin{matrix} NP_i & * & X_i \\ & & [+V, \alpha N] \end{matrix}$$

‘→’は素性マトリクスの指定を表わし、範疇素性  $[+V, \alpha N]$  をとる主要部  $X_i$  によって統率された名詞句  $NP_i$  に、素性マトリクス  $[-S, -\alpha CA, \dots]$  が指定されるとみなす。そのとき、 $NP_i$  の格はこの素性マトリクスで示される。明らかにこの  $X$  は  $V$  ( $[+V, -N]$ ) か、 $A$  ( $[+V, +N]$ ) である。したがって、素性マトリクスは  $\alpha$  の値に対応して、 $[-S, +CA, \dots]$ 、または、 $[-S, -CA, \dots]$  となる。(17)の規定により、これらは形態上の格としては対格、または斜格で表わされる。つまり、(22)では、主要部  $X_i$  の範疇素性のうち  $[\alpha N]$  を無標にしておくことによって、結果としては語彙範疇が中立化されることになる。<sup>(13)</sup> (14)で  $X=V$  とすると、(15b)のような述語的用法も同様に説明される。

(23)



また、改めて述べるまでもなく、前置詞の目的語にも格が与えられるが、これを範疇素性  $[-V, -N]$  で表わすと、(17)から明らかなように目的語に付与される格は素性マトリクス  $[-S, -CA, \dots]$  で示される。ただし、‘…’には前置詞の対格目的語を、与格、あるいは属格の目的語から識別する素性の複合体が与えられる。したがって、動詞、または前置詞の目的語に素性マトリクスを指定する規則として(24)がたてられる。その適用は、上に述べてきたことと同様である。

(24)

$$C(NP_j) \longrightarrow \begin{bmatrix} -S \\ \alpha CA \\ \vdots \\ \vdots \end{bmatrix} / \begin{matrix} NP_j & * & X_j \\ & & [\alpha V, -N] \end{matrix}$$

Chomsky(1981)は格付与要素の類として素性  $[-N]$  を挙げているが、これは(24)の規則によって、 $[\alpha V, \beta N]$  の  $[\beta N]$  については  $\beta$  にマイナス値を与え、 $[\alpha V]$  については無標にしておくことと再定式化することができるだろう。英語では形容詞が格を付与することがないので、(22)の規則は存在しない。それに対して、ドイツ語では(22)に加え、(24)の規則も可能である。以上のような定式化が妥当であれば、 $[\alpha N]$  については無標のかたちで素性マトリクス  $[+V, \alpha N]$  を与えておき、 $\alpha$  の値によって形容詞と動詞を識別することができる。したがって、ドイツ語の形容詞を素性  $[+V]$  によって規定することは充分ではないと考える。

4. このように、i)格を構成する素性を設定し、ii)統率にもとづき、範疇素性に対応して素性マトリクスを有標化する方式は、オランダ語に対しても適用される。

オランダ語の形容詞のなかには、名詞の指定辞としては用いられず、動詞句の一部として用いられるものがある：bedacht, behept, benieuwd, bestand, beu, bijster, deelachtig, gedachtig, gewend, indachtig, onwel, prat, tuk, wars, etc.<sup>(14)</sup> こうした形容詞は名詞句とともに用いられ、この名詞句の後におかれる。

- (25) a. Hij was het gezanik beu.<sup>(15)</sup>  
           (he was of-the-botheration tired)  
       b. Ik was het mij niet bewust.  
           (I was of-that myself not conscious)

上記の形容詞には範疇部門で、(23)で示したような句構造が与えられると仮定すると、NP-Complement の素性マトリクスは規則(22)によって指定される。しかし、一方では(10)のように、日常の口語表現では前置詞句が属格の名詞句にとって代わる場合がある。これは、おそらく有標のケースであろう。そのときの素性マトリクスは次の規則によって指定される。

$$(26) \quad C(NP_k) \longrightarrow \begin{bmatrix} -S \\ -CA \\ \vdots \\ \vdots \end{bmatrix} \quad / \quad \begin{matrix} NP_k * X_k \\ [\alpha V, \alpha N] \end{matrix}$$

主要部  $X_k$  は、 $\alpha$  がプラス値のとき、形容詞となり、マイナス値のとき、前置詞となって、各々 NP-Complement には斜格を構成する素性マトリクスが指定される。ただし、 $\alpha$  の値に対応して属格と与格を識別する素性がさらに明示されねばならない。英語では、形容詞が格を付与しないことから、規則(26)は存在しない。オランダ語では、(10)のような例から見て、この規則が有標化さ

れていると考えられる。これは、形態論的な格に関してはオランダ語より複雑な区別のみられるドイツ語でも同様である。

- (27) a. Sie sind süßen Weins(gen.) voll.  
 b. Sie sind voll von süßem Wein.  
 (they are full of sweet wine)

したがって、素性マトリクスの指定に関する限り、ドイツ語とオランダ語は共通の有標性を示すと言えるだろう。

以上のように、格付与は、語彙範疇を中立化し、格の素性と関係づけることによって定式化することができる。ただし、中立化されるのは語彙範疇のみでなく、格も中立化されることが予想されること、また、語彙範疇の中立化は $\bar{X}$ 理論をもとに基礎づけることができるが、格の中立化に対してもなんらかの原理を設定する必要があることなど、さらに詳しい考察が必要であろう。もっとも、このような問題は統率理論や $\theta$ 理論など原理の下位システムと並行して考察することになり、その意味では、抽象度のレベルを高めることによってのみ説明可能な性質のものであろう。

アムステルダム近郊にて、1981年9月10日

〔註〕

- (1) Chomsky(1981), chapter 2.3, 3.2.2.
- (2) 同上, chapter 2.3.
- (3) 同上, chapter 3.2.2.
- (4) 他の格については、同上, chapter 3.2.2.
- (5) 同様なことはドイツ語についても指摘される。4. 参照。なお、ドイツ語の形容詞（属格支配、与格支配）の用例と、それに対応したオランダ語の文例については Kieft(1978), pp.62-64 参照。
- (6) Rijpma/Schuringa(1978), p.255.
- (7) Van Riemsdijk (1980) 参照。
- (8) この問題については、たとえば Huber/Kummer(1974), 7. Verb-Shift 参照。
- (9) 以下、Van Riemsdijk(1980)に依る。
- (10) “Abstract case is assigned by structural heads that are non-distinct from [-N].” (Van Riemsdijk(1980), p.8) この条件は、他の素性 [+V], [-N], … とは係わりなく、ある語彙範疇が少なくとも素性 [+N] をとるならば、その語彙範疇を格付与要素の類から除くことを意味している。明らかに、これは素性 [+V] によってドイツ語の形容詞を規定することを前提として初めて有効となる条件である。その問題については3. で触れる。
- (11) Den Besten(1981)は、ドイツ語の主格主語と与格目的語との語順交替を考察し、与格目的語が V' によって統率されることを示している。この結論によれば、素性マトリクス [-S, -CA, …] は [+V] に支配される NP に指定するのが妥当であろう。
- (12) Den Besten(1979), p.39.
- (13) 素性マトリクスの「有標性」とは、 $\alpha$ ,  $\beta$ , … の値が定まることを指す。したがって、値が未定るとき、それを無標とみなす。
- (14) Rijpma/Schuringa(1978), p.118.
- (15) 同上, p. 118.

【参考文献】

- Besten, Hans den (1979) : A Case filter for passives, mimeographed, University of Amsterdam.
- Besten, Hans den (1981) : Government, syntactic structure and Case, mimeographed, University of Amsterdam.
- Chomsky, Noam (1981) : Lectures on Government and Binding, Dordrecht.
- Huber, Walter/Werner Kummer (1974) : Transformationelle Syntax des Deutschen I, München.
- Kieft, P.(1978) : Deutsche Sprachlehre, 6. Auflage, Zutphen.
- Riemsdijk, Henk van (1980) : On theories of Case : the Case of German adjectives, mimeographed, University of Amsterdam/MIT.
- Rijpma, E./F.G.Schuringa (1978) : Nederlandse spraakkunst, Groningen.